

## ウズベク語における動名詞・形動詞の機能的差異 —補文節として用いられる場合について—

日高 晋介

### Verbal nouns and participles in Uzbek complement clauses: a functional difference

Shinsuke HIDAKA

#### Abstract

In this article, I clarify the differences between verbal nouns and participles in Uzbek, based on both data from text and elicitation. Particularly, I deal with verbal nouns and participles used as complement clauses. The grammatical difference between the two, as established in previous works (Abdurahmonov va Shoabdurahmonov, Hojiev 1975; Kononov 1960; Bodrogligeti 2003), is that participles denote the tense-aspect opposition, whereas verbal nouns do not.

As mentioned above, I conducted two types of examination. First, I collected examples of verbal nouns and participles used as complement clauses. These examples were extracted from text data consisting of 12 articles from an internet news site and 28 pages from a novel. I concluded that the participle expresses only the realis modality whereas the verbal noun can express either the realis or the irrealis modality depending on the context.

Second, to confirm the conclusion from the above text examination, I conducted an elicitation session with an Uzbek native speaker who also speaks Japanese fluently. The process of this examination was follows. First, I composed Japanese sentences with complement clauses; the matrix clause verbs were chosen based on Noonan's (2007: 121-144) 12 matrix verbs. Next, the native speaker translated these sentences into Uzbek. In addition, I asked her whether the verbal nouns used in these sentences can replace the participles, and vice versa. The result of the elicitation session supported the conclusion drawn from analyzing text data that the participle expresses only the realis modality, whereas the verbal noun can express both the realis and the irrealis modality.

- 0. はじめに
- 1. 本稿を解するための背景知識
  - 1.1. 補文節
  - 1.2. ウズベク語形態法
- 2. 先行研究・問題提起
  - 2.1. 形動詞
  - 2.2. 動名詞
  - 2.3. 問題提起
- 3. テキスト調査
  - 3.1. 方法
  - 3.2. 分析
    - 3.2.1. 目的語の位置を占める場合
    - 3.2.2. 主語の位置を占める場合

- 3.3. 小結
  - 4. エリシテーション調査
    - 4.1. 方法・結果
    - 4.2. 分析
      - 4.2.1. 形動詞・動名詞両方とも用いられる例
      - 4.2.2. 動名詞のみ用いられる例
      - 4.2.3. 形動詞のみ用いられる例
    - 4.3. 小結
  - 5. おわりに
  - 6. 今後の課題
- 略号一覧  
参考文献

## 0. はじめに

本稿は、ウズベク語において動名詞・形動詞節が補文節として用いられる場合について、テキスト調査及びエリシテーション調査を用いて、両者の相違について明らかにすることを目的とする。先行研究の記述から得られる両者の相違点としては、形動詞はテンス・アスペクト（以下 TA とする）の対立によって異なる形式が用いられるが、動名詞には TA の対立による形式の差異はない、という点である。本稿では、両者の相違点は、そのような TA 形式の差異だけではないことを主張する。特に *realis/irrealis* に関して、両者に差異が認められることを明らかにする。

本稿の構成は以下のとおりである。第一章で本稿を解するための背景知識について述べ、第二章で先行研究の記述を参照し、問題提起を行う。第三章と第四章では、それぞれテキストデータによる調査と、エリシテーションによる調査について述べる。最後の第五章では、本稿のまとめ、および今後の課題について述べる。

なお、本稿における例文番号・日本語訳・グロス は筆者による。ウズベク語の表記は、先行研究の表記法に関わらず、ラテン文字正書法に統一する。

## 1. 本稿を解するための背景知識

1.1 節で、本稿の主題である補文節について、Noonan (1985) による定義を参照する。1.2 節では、ウズベク語の名詞及び動詞の形態法について概略を述べる。

### 1.1. 補文節

*complementation* についての類型論的研究の先駆けとして、Noonan (1985) が挙げられる。その冒頭で *complementation* について以下のように述べている：

By complementation, we mean the syntactic situation that arises when a notional sentence or predication is an argument of a predicate. For our purposes, a predication can be viewed as an argument of a predicate if it functions as the subject or object of that predicate. (Noonan 1985: 42, Noonan 2007: 52)<sup>1</sup>

以上の記述から、筆者は、Noonan (1985: 42) が補文節を「主節動詞の主語あるいは目的語として機能する、ある概念を表す文あるいは叙述」のことを指している、と判断する。本稿でも Noonan (1985) による、

この形態統語的な定義を採用する<sup>2</sup>。

では、上の基準を満たす補文節とは、具体的にどのようなものを指すのだろうか。具体的には、以下の(2)と(4)の斜体部を指す。Noonan (1985: 42) による説明の要約を次にあげる：(1)の主語は Elliot であり、(3)の目的語は Nell である。Elliot と Nell は、(2)と(4)のように、述部と一連の項から成るもの(斜体部)で置き換えられる。ただし(4c)は意味上の主語が省略されている。

- (1) Elliot annoyed Floyd  
 (2) a. *That Elliot entered the room* annoyed Floyd  
       b. *Eliot's entering the room* annoyed Floyd  
       c. *For Eliot to enter the room* would annoy Floyd  
 (3) Zeke remembered Nell  
 (4) a. Zeke remembered *that Nell left*  
       b. Zeke remembered *Nell's leaving*  
       c. Zeke remembered *to leave*

(Noonan 1985: 42)

## 1.2. ウズベク語形態法

表1に動詞形態法、表2に名詞形態法をそれぞれ挙げる。( )内の要素は任意要素であることを示す。動詞形態法の中の「形動詞」「動名詞」については、次節で詳述する。

表1：ウズベク語動詞形態法

動詞語幹					
語根※1	(態)	(可能)	(否定)	定動詞	述語人称
				形動詞	※2
				動名詞	
				副動詞	

※1：動詞語彙派生接辞を含む

※2：名詞形態法(複数-所有人称-格)適用

表2：ウズベク語名詞形態法

名詞語幹				
語根	(派生)	(複数-lar)	(所有人称)	格

それぞれ表3と表4に、所有人称接辞と格体系を挙げる。対格は、それが付く名詞が定である場合 *-ni*、不定である場合何も付かない。

表3：ウズベク語の所有人称接辞

	単数	複数
1人称	<i>-(i)m</i>	<i>-(i)miz</i>
2人称	<i>-(i)ng</i>	<i>-(i)ngiz</i>
3人称	<i>-(s)i</i>	<i>-(s)i/-lari<sup>3</sup></i>

表4：ウズベク語の格体系

	形式
主格	なし
対格	<i>-ni</i> / なし
属格	<i>-ning</i>
与格	<i>-ga</i>
処格	<i>-da</i>
奪格	<i>-dan</i>

## 2. 先行研究・問題提起

本節では、形動詞、動名詞について先行研究の記述を参照した後に、本稿で扱う問題を提起する。

### 2.1. 形動詞

まずは、形動詞の記述を参照する。形動詞は連体修飾、節名詞化の機能を持つ<sup>4</sup>。形動詞それぞれの機能については、次頁の表5を参照されたい。

- (5) 連体修飾 (Bodrogligeti 2003: 617)

*falokat yuz ber-gan joy*  
*disaster face give-PTCP.PAST place*  
 「災害が起きた場所」

- (6) 節名詞化 (Bodrogligeti 2003: 624)

*Siz-ni hechkim aybla-yotgan-i yo'q.*  
 2PL-ACC anybody blame-PTCP.PROG-3SG.POSS no  
 「あなたを誰かが非難することはない。」

表 5：形動詞の機能と注釈

	機 能	注 釈
<i>-gan/ -kan/ -qan</i>	過去時制、完了動作 (Bodrogligeti 2003: 616, Kononov 1960: 238)	特になし
<i>-(a)yotgan</i>	現在時制 (Kononov 1960: 238)	
	進行中のアクチュアルな動作 (Bodrogligeti 2003: 622-623)	
<i>{-a/ -y}digan</i>	現在未来時制 (Kononov 1960: 238, Bodrogligeti 2003: 620)	比較的まれ。 否定形式 <i>-mas</i> (Kononov 1960: 239)
<i>-(a)r</i>	未来時制 (Kononov 1960: 239, Abdurahmonov va boshq 1975: 514)	
	習慣的あるいは結果として起こる (eventual) 動作の遂行 (Bodrogligeti 2003: 632)	
<i>-(u)vchi</i>	人に関する不変的特性、通常は職業 (Kononov 1960: 239)	まれに用いられる。 (Abdurahmonov va boshq 1975: 514)
	主要部に不変に存在する習慣的特性。未来の特性を表すことも (Abdurahmonov va boshq 1975: 514)	
	他人あるいは物の動作特徴、ある職業に伴う動作特徴 (Bodrogligeti 2003: 638)	

ただし、形動詞は、絶対テンスのみを表すのではなく、相対テンスも表す場合があることに注意されたい。Abdurahmonov va Shoabdurahmonov, Hojiev (1975: 510-511) は次のように述べたのちに (7) を挙げている：「しかし、形動詞の形式は、動作の発話時との関連を直接示さない。形動詞によって表される時制は、動詞の屈折変化形による動作を行う時間、文の動詞によって理解される時間、あるいは文脈上にある他の語によって表される時間に対して特徴づけられる。」

(7) *Yigit qora qush-lar pastla-yotgan tomon-ga qara-b chop-di-ø.*  
 young black bird-PL go.down-PTCP.PROG direction-DAT see-CVB run-PASTI-3SG

「若者は黒い鳥たちが下に降りる方向に向かって走った。」

(Abdurahmonov va Shoabdurahmonov, Hojiev 1975: 511; 下線は筆者による)

つまり、主節動詞の時制標識によって表される時間、形動詞を形成する動詞語幹の意味、副詞などによって、形動詞の時制が解釈される。表 5 を参照するに、*-yotgan* は現在時制を表すことがわかる。しかし、(7) から明らかのように、この *-yotgan* が絶対的な現在を表していないことに注意されたい。(7) 全体のイベン

トは過去である。これに対して、形動詞は、その動作が発話時過去の中で進行中であることを表している。なお、本稿では、特に *-gan/ -kan/ -qan*, *-(a)yotgan*, *{-a/ -y}digan* の三種の形動詞を取り扱う。*-(a)r*, *-(u)vchi* は、上の表 5 にあるように、比較的まれにしか用いられないためである<sup>5</sup>。本節以降この三種の形動詞の表記をそれぞれ *-gan*, *-yotgan*, *-digan* とし、それぞれのグロスを先行研究に従い、-PTCP.PAST, -PTCP.PROG, -PTCP.NPST とする<sup>6</sup>。

## 2.2. 動名詞

Abdurahmonov va Shoabdurahmonov, Hojiev (1975: 525) では、*-(i)sh*, *-(u)v*, *-moq* 三つの接辞が「動名詞」(Harakat nomi) を形成するとしている。本稿では、その三つの接辞のうちの一つである、*-(i)sh* (否定形

-*maslik*<sup>7)</sup>について取り上げる。これには二つの理由がある。一つに、Abdurahmonov va Shoabdurahmonov, Hojiev (1975: 525, 527) は、動名詞の中でも *-(i)sh* が非常に多く用いられ、*-(u)v*, *-moq* は *-(i)sh* に比べると多く用いられない、と述べていること。二つ目には、三者それぞれに機能的な差異はないということがある。これは、本節で挙げる先行研究において、三者それぞれに機能的な差異があるという記述がないことに従っている。

次に Bodrogligeti (2003: 214-216) と Reshetov va Ibrohimov, Tursunov, Kamolov (1966: 322) の記述を参照する。Bodrogligeti (2003: 214-216) は、*-(i)sh* を *-ish<sub>1</sub>* と *-ish<sub>2</sub>* に分類している。しかし、*-ish<sub>1</sub>* は、動詞から名詞を派生するものであると判断できるため、本稿では取り扱わない<sup>8)</sup>。*-ish<sub>2</sub>* は、動詞語幹(単純・派生、能動・受動、肯定・否定、可能・不可能)に付加し、動作の名前を表す具体化された動名詞として用いられる。さらに、動詞屈折における第二不定詞<sup>9)</sup>としても用いられる。Reshetov va Ibrohimov, Tursunov, Kamolov (1966: 322) は、この動名詞について「ある動作を、時制、人称、数、法のようなカテゴリーからゼロの状態で表す。(中略)つまり、動詞の動名詞形は純粋な動作の概念を表すために働く。」と述べている。

したがって、本稿で扱う動名詞接辞は、形動詞と同様に、「どのような動詞語幹にも付加することができる、つまり動詞屈折に近い特徴を持つ」と言える。さらに、動名詞自体は日本語でいえば「～すること」に相当するような動作の概念を表す(ただし、時制、人称、数は表さない)、と言える。以下に例を示す。(8)では動名詞 *bil-ish*「知っていること」が対格目的語(*ish-i-ni*「その仕事を」)を保持し、副詞句(*shu qadar*「そのように」)で修飾されている。以上より、形動詞と同じように、動詞的な特徴を保持していることがわかる(形動詞の例は(6)を参照されたい)。

(8) *o'z ish-i-ni shu qadar puxta bil-ish-i...*  
REFL work-3SG.POSS-ACC that like well know-VN-3SG.POSS

「彼が彼自身の仕事をそのようによく知っていること…」

(Bodrogligeti 2003: 572)

### 2.3. 問題提起

以上見てきたように、先行研究の記述を参照すると、形動詞と動名詞にはどちらも節名詞化機能があるという共通点が見いだせる(形動詞は(6)、動名詞は(8)を参照されたい)。両者の相違点としては、2.1節の表5に示したように、形動詞はTAの対立によって異なる形式が用いられるが、動名詞にはTAの対立による形式の差異はない、ということが挙げられる。

しかし、両者の相違点は、TA対立の有無だけであろうか。本稿は、二種類の調査によって、形動詞・動名詞の相違点を探ることを目的とする<sup>10)</sup>。第一に、テキストデータを基に、形動詞・動名詞節が上位節の必須項(主語・目的語)である用例を抽出・分析する(§3)。そして第二に、エリシテーション調査から得られた用例を分析する(§4)。

## 3. テキスト調査

本節では、調査方法を述べたのちに(§3.1)、抽出した用例を分析し(§3.2)、最後にこの調査の小结を述べる(§3.3)。

### 3.1. 方法

インターネットニュースサイト Ozodlik radiosi (<http://www.ozodlik.org>) から任意に選んだ12本の記事<sup>11)</sup>と、*Besh qiz va bir yigit*『五人の女の子と一人の若者』という小説の28ページ分<sup>12)</sup>を、形態素解析したデータを用いる。本節では、そのデータを用いて、補文節である形動詞・動名詞節の用例を抽出する。

その結果、109例を抽出することができた。次の表6に形式別の分布を挙げる。

表 6：形式別分布

	形動詞			動名詞	計
	-gan(lik)	-yotgan	-digan	-(i)sh/-maslik	
目的語の位置を占める場合 (§ 3.2.1)	23	1	0	24	48
主語の位置を占める場合 (§ 3.2.2)	14	1	1	45	61
計	37	2	1	69	109

### 3.2. 分析

本節では、形動詞節および動名詞節が、補文節として用いられる場合、どのような上位節述語と共起するののかについて分析する。以下、3.2.1 節で目的語の位置を占める場合、3.2.2 節で主語の位置を占める場合について、それぞれ述べる。

#### 3.2.1. 目的語の位置を占める場合

まず、以下に形動詞節・動名詞節が上位節の目的語の位置を占める際の、上位節述語一覧を挙げる。

形動詞 -gan(lik)/-yotgan 24 例：

*ko'r-*「見る」6 例、*ayt-*「言う」5 例、*bil-*「知る」3 例、*ma'lum qil-*「知らせる」2 例、*his qil-*「感じる」2 例、*kuzat-*「観察する、見る」、*esla-*「覚える」、*xulosa qil-*「結論付ける」、*eshit-*「聞く」、*ko'z oldilariga keltir-*「目の前にもたらす」

動名詞 -(i)sh/-maslik 24 例：

*ayt-*「言う」4 例、*o'rgat-*「教える」2 例、*bil-*「知る」2 例、*ravo ko'r-*「許可する」2 例、*o'rgan-*「習う」、*tushuntir-*「理解させる」、*rejala-*「計画する」、*beixtiyor*「意図せず」、*top-*「見つける」、*davom ettir-*「続けさせる」、*tavsiya qil-*「勧める」、*boshla-*「始める」、*maslahat ber-*「助言を与える」、*o'z zimmasiga ol-*「自身の責任にする」、*talab qil-*「要求する」、*kut-*「待つ」、*tushuntir-*「理解させる」、*bo'yinga ol-*「任せる (lit. 首に取る)」

まず形動詞節と動名詞節の共通点について述べる。形動詞節は、その節で表わされる事態が事実である、もしくは実現される場合に用いられる。動名詞節でも同様の傾向がある。上に挙げた上位節動詞一覧を見ると、形動詞節でも動名詞節でも上位節に *ayt-*「言う」

が多く用いられている。以下に、その例を挙げる。形動詞は (9)、動名詞は (10) をそれぞれ参照されたい。なお、次の (9) から、形動詞・動名詞と上位節述語を太字にする。

(9) *Lekin*      *O'zbekiston*      *bank*      *soha-si*      *mulozim-lar-i*      ...      *[so'm-dan*  
but      Uzbekistan      bank      field-3SG.POSS      servant-PL-3SG.POSS      sum-ABL

*ko'zla-n-gan*      *umid*      *va*      *maqsad-lar*      *to'la*      *amal-ga*  
aim.for-PASS-PTCP.PAST      hope      and      purpose-PL      filled      action-DAT

**osh-gan-i-ni]o**

exceed-PTCP.PAST-3SG.POSS-ACC

**ayt-a-di**

say-NPST-3SG

「しかし、ウズベキスタンの銀行の従業員は、(中略) ソムから期待された希望と目的が満たされたと言う。」

(01\_07\_2014: 28)<sup>13</sup>

(10) <i>Samarqand</i>	<i>viloyat</i>	<i>hokimlig-i</i>	<i>tizim-i-dagi</i>	<i>boshqarma-lar-dan</i>
NAME	province	control-3SG.POSS	system-3SG.POSS-ADJLZ	manegement-PL-ABL

<i>bir-i-da</i>	<i>[boshliq</i>	<i>bo'lib</i>	<b><i>ishla-sh-i-ni]o</i></b>	<b><i>ayt-gan</i></b>	52
one-3SG.POSS-LOC	head	as	work-VN-3SG.POSS-ACC	say-PTCP.PAST	fifty.two

*yashar ayol*  
years.old lady

「サマルカンド州政府システムの機関の一つで、リーダーとして働くと言った 52 歳の女性」(20\_08\_2014: 104)

次に形動詞と動名詞節の相違について述べる。動名詞節は、上の (10) のようにその節で表わされる事態が事実である場合にも用いられるが、事態が未実現で

あることを表す場合も多々見られる。これを表す形動詞節は、調査で扱ったテキストデータに現れていない。

(11) ... <i>va</i>	<i>shu-ning</i>	<i>uchun</i>	<i>[u-nga mana</i>	<i>bu</i>	<i>ishora</i>	<i>orqali</i>	<b><i>kir-ish-ni]o</i></b>
and	that-GEN	for	that-DAT that	this	sign	through	enter-VN-ACC

***tavsiya qil-a-miz:***  
recommendation do-NPST-1PL

「そしてそのため我々はそれに次の URL を通して入ることを勧める：」

(13\_03\_2014: 128)

(12) <i>[Vatan-dan</i>	<i>olis-da</i>	<i>Rossiya-da</i>	<b><i>ishla-b</i></b>	<i>yur-ish-ni]o</i>
homecountry-ABL	distance-LOC	Russia-LOC	work-CVB	walk-VN-ACC

<i>farzand-lar-im-ga</i>	<b><i>ravo</i></b>	<b><i>ko'r-ma-y-man,</i></b>	—	<i>de-y-di</i>	<i>Mamaraim</i>	<i>aka</i> <sup>14</sup> .
child-PL-1SG.POSS-DAT	allowable	see-NEG-NPST-1SG		say-NPST-3SG	NAME	brother

「故郷から遠くで、ロシアで働くことを子供たちに許さない、とママライムさんは言う。」

(23\_08\_2014: 115)

つまり、今回の調査で得られた補文節とその上位節述語を観察すると、次のようなことが言える：「形動詞節は *realis* のみ、動名詞節は *realis/irrealis* どちらのイベント・状態も表せる。」

Noonan (2007: 106) は *realis* と *irrealis* を次のように説明している：「*realis* modality は、命題が事実として主張される complement、または *factual/actual* なイベント・状態について述べられる complement と結び

つく<sup>15</sup>。irrealis modality は、そのような含意はない。」  
そして以下の表 7 に、上位節の時制に依存する補文  
(dependent time reference: DTR; それ自体で時制を表さ

ない complement のことを指す)<sup>16</sup>は、通言語的に  
irrealis を表す傾向にあることを示している。

表 7: 補文の役割における realis and irrealis modality

COMPLEMENT ROLE 「補文の役割」	
REALIS	assertion 「主張」
	report of assertion 「主張の報告」
	positive propositional attitude 「命題への肯定的な姿勢」
	background (factive) 「背景 (factive)」
IREALIS	negative propositional attitude 「命題への否定的な姿勢」
	hypothetical proposition 「仮説的な命題」
	<b>DTR (commands, requests, intentions, desires, etc.)</b> 「上位節述語への依存的な時制参照 (命令、要請、意志、願望など)」

(Noonan 2007: 106; Table 2.3, 太字は筆者による)

さらに、この「形動詞節は realis のみ、動名詞節は  
realis/irrealis どちらも表すことができる」という分析  
は、形動詞節・動名詞節が主語である場合にも当ては  
まる。

### 3.2.2. 主語の位置を占める場合

以下に、形動詞節・動名詞節が上位節の主語の位置  
を占める際の、上位節述語一覧を挙げる。

形動詞 *-gan/-yotgan/-digan* 15 例:

*yo'q* 「ない」6 例、*xabar qilin-* 「知らされる」、*aytil-* 「言われる」、*tinchini buz-* 「(彼の) 平静を壊す」、*qo'l kel-* 「有  
利になる」、*kuzatil-* 「見られる」、*ma'lum* 「知られている」、*rost* 「本当」、*bilin-* 「知られる」、*kel-* 「来る」

動名詞 *-(i)sh/-maslik/-moq* 47 例:

*kerak/lozim/darkor* 「必要である」16 例、*mumkin* 「できる」12 例、*boshlan-* 「始まる」2 例、*kutil-* 「予期され  
る」2 例、*tasvirlan-* 「描かれる」2 例、*majbur bo'l-* 「義務である」、*oddiy holga aylan-* 「普通の状態に変わる」、  
*noqulayliklar yarat-* 「不快さを作る」、*sodir bo'l-* 「起きる」、*rejalan-* 「計画される」、*taqiqlan-* 「禁止される」、  
*oson kech-* 「簡単に行く」、*yuzga chiq-* 「生じる」、*tushuntir-*<sup>17</sup> 「理解させる」、*kuzatil-* 「見られる」、*qiyin* 「難しい」、  
*og'ir* 「重い」、*joiz* 「正当である」

まず、形動詞の場合について検証する。この場  
合、上位節述語が *yo'q* 「ない」であるパターンが多  
く見られる。6 例全てが *-gan* の用例であった。この  
場合、Kononov (1960: 217) では「強い否定を表す」、

Bodrogligeti (2003: 874) では「過去の経験を表す」  
としている (以下の例文の露訳・英訳は先行研究それ  
ぞれによる)。



(13) Kononov (1960: 217)

*yoʻz-gan-im*                      *yoʻq*  
write-PTCP.PAST-1SG.POSS      no  
'(я) (решительно) не писал.'  
「(私は) (全く) 書かなかった」

(14) Bodrogligeti (2003: 874)

*oʻqi-gan-ingiz*                      *yoʻq*  
read-PTCP.PAST-2PL.POSS      no  
'you never read'  
「あなたは全く読まなかった」

以下 (15) に、テキストデータからの例を挙げる。

- (15) *Ha, [choʻl-ni oʻzlashtir-ish oson kech-gan-i]s yoʻq.*  
yes wildness-ACC master-VN easy pass-PTCP.PAST-3SG.POSS no  
「ええ、荒野を開拓することが簡単に行くことはなかった。」 (BeshQiz\_va\_BirYigit.txt: 328)

次に、動名詞節について検証する。今回の調査では、動名詞節と上位節述語が組み合わさることで、モーダルな意味を表す場合が多く見られた (47 例中 29 例)。以下に *-(i)sh+mumkin* 「～できる／かもしれな

い」、*-(i)sh+kerak/lozim/darkor* 「～しなければならない」、*-(i)sh+majbur boʻl-* 「～しなければならない」の順に例を挙げる。

(16) *-(i)sh + mumkin* 「～できる／かもしれない」 (47 例中 12 例)

*Sinov muddat-i-dan soʻng [barcha turniket-lar almashtir-il-ish-i]s mumkin.*  
test period-3SG.POSS-ABL after all turnstile-PL change-PASS-VN-3SG.POSS possible  
「試験運用後、全ての回転式改札が取り換えられるかもしれない。」 (07\_08\_2014: 34)

(17) *-(i)sh + kerak/lozim/darkor* 「～しなければならない／～にちがいない」 (47 例中 16 例)

*Albatta [bu tendentsiya boʻl-ish-i]s kerak edi.*  
of.course this tendency be-VN-3SG.POSS necessary PAST-3SG  
「もちろん、これは傾向であるにちがいがなかった。」 (01\_07\_2014: 124)

(18) *-(i)sh + majbur boʻl-* 「～しなければならない」 (47 例中 1 例)

*jumla-dan [bozor-ga tush-gan odam soʻm-i-ni xalta-ga sol-ib bor-ish]s*  
whole-ABL bazaar-DAT fall-PTCP.PAST person sum-3SG.POSS-ACC bag-DAT put-CVB go-VN

*majbur boʻl-moqda-o, de-ya misol keltir-di-o.*  
forced become-PROG-3SG say-CVB example lead-PAST-3SG

「つまり、バザールに行った人がスム をカバンに入れて行かなければならなくなっている、と例を挙げた。」 (01\_07\_2014: 116)

以上において、モーダルな意味を表す場合について検証してきた。しかし、モーダルな意味を表さない文

も多く存在する (47 例中 18 例)。

(19) ..., *shu sababli* [*yer-lar-imiz-ning* *sho'rlan-ish-ijs* *yuz-ga*  
 that because.of place-PL-1PL.POSS-GEN be.damaged.by.salt-VN-3SG.POSS face-DAT

*chiq-ib* *qol-gan-o,*  
 go.out-CVB remain-PRF-3SG

「…、そのため、我々の土地は塩害を受けることが生じて (lit. 表面に出て) しまった、」

(BeshQiz\_va\_BirYigit.txt: 374)

以上の用例を分析すると、3.2.1 節末で述べたように、形動詞節は *realis* な事態を表し (15)、動名詞節は *realis/irrealis* どちらも表すことができる (*realis*: (19)、*irrealis*: (16), (17), (18)) と言える。

### 3.3. 小結

以上第3節ではテキストデータを基に分析を行った。次に小結を述べる。形動詞・動名詞節が補文節として用いられる場合、「形動詞節は *realis* のみ、動名詞節は *realis/irrealis* どちらも表すことができる」と言える。

次節では、以上の分析を裏付けるために、エリシテーション調査を行う。

## 4. エリシテーション調査

前節と同様、調査方法を述べたのちに (§4.1)、抽出した用例を分析し (§4.2)、最後にこの調査の小結を述べる (§4.3)。

### 4.1. 方法・結果

Noonan (2007: 121-144) の12の上位節述語を参考にして日本語文を作り、それをコンサルタント<sup>9)</sup>にウズベク語に訳してもらった。調査に用いた日本語文は、補文節を一律「リングを食べる」にし、それぞれ上位節述語のみ変えてある (この調査法は Noonan 2007:

149-150 を参考にしている)。さらに、その際に用いられた形動詞・動名詞がそれぞれ互換可能かどうかを尋ねる。

表8に上位節述語の一覧及び調査結果をまとめる。「調査結果」の欄に×が書かれている場合は、動名詞及び形動詞が用いられない、あるいは両者が補文節として用いられない場合であることに注意されたい (例えば、「操作を表す述部」は補文節ではなく、接尾辞を用いて表される)。本稿では、補文節について考察するため、上記の場合については考察の対象外とする。

### 4.2. 分析

本節では、まず形動詞・動名詞両方とも用いられる例 (§4.2.1)、次に動名詞のみ用いられる例 (§4.2.2)、最後に形動詞のみ用いられる例 (§4.2.3) を挙げる。

#### 4.2.1. 形動詞・動名詞両方とも用いられる例

表8を参照すると、補文節に形動詞も動名詞も用いられる例は、「発話を表す述部」「命題に対する姿勢を表す述部」「評価を表す述部」「知識と知識獲得を表す述部」「恐れを表す述部」である (以下から各上位節述部を指す場合、「を表す述部」を省略する)。これらの場合、形動詞と動名詞が相互に互換可能というわけではない。非過去を表す補文節には、非過去形動詞 *-digan* ではなく、動名詞 *-(i)sh* が用いられる。

表 8：上位節述語の一覧及び調査結果

	上位節述語	調査結果		分析
		形動詞	動名詞	
Utterance predicates 「発話を表す述部」	<i>ayt-</i> 「言う／話す」	+	+	§ 4.2.1
	<i>so'ra-</i> 「尋ねる」	+	+	
Propositional attitude predicates 「命題に対する姿勢を表す述部」	<i>ishon-</i> 「信じる」	+	+	
	<i>gumonsira-</i> 「疑う」	+	+	
Commentative predicates (fatives) 「評価を表す述部」	<i>afsusla-</i> 「残念に思う」	+	+	
	<i>g'alati</i> 「おかしい」	+	+	
	<i>rost</i> 「本当である」	+	+	
Predicates of knowledge and acquisition of knowledge 「知識と知識獲得を表す述部」	<i>bil-</i> 「知る」	+	+	
	<i>ko'r-</i> 「見る」	+	+	
	<i>eshit-</i> 「聞く」	+	+	
Predicates of fearing 「恐れを表す述部」	<i>xavotirlan-</i> 「心配する／怖がる」	+	+	
Desiderative predicates 「願望を表す述部」	<i>xohla-</i> 「望む／願う」	-	+	§ 4.2.2
Manipulative predicates 「操作を表す述部」	<i>majburla-</i> 「強制する」	-	+	
	～させる	X		
Modal predicates 「モーダルな述部」	<i>ta'qiqla-</i> 「禁止する」	-	+	
	<i>kerak</i> 「～しなければならない／すべきだ」	-	+	
	～に違いない	X		
	<i>mumkin</i> 「できる」	-	+	
Immediate perception predicates 「直接知覚を表す述部」	<i>ko'r-</i> 「(～しているのを) 見る」	+	-	§ 4.2.3
Pretence predicates 「ふりを表す述部」	= <i>dek ko'rsat-/tut-</i> 「～するふりをする (lit. ～ように見せる)」	X		対象外
	<i>alda-</i> 「だます」	X		
Achievement predicates 「達成を表す述部」	～しようとする	X		
	～に失敗する	X		
Phasal predicates (aspectuals) 「局面を表す述部」	し始める／し終わる／し続ける	X		

まず、以下に「発話」の例を挙げる。補文節の表す動名詞が用いられる (20b)。  
 イベントが非過去の場合、*-digan* は用いられず (20a)、

## (20) 「発話」

a.	<i>A</i>	<i>B-ga</i>	<i>C</i>	<i>olama-ni</i>	<i>ye{-gan/*-digan/-yotgan}-i-ni</i>
	NAME	NAME-DAT	NAME	apple-ACC	eat-PTCP.PAST/-PTCP.NPST/-PTCP.PROG-3SG.POSS-ACC

*ayt-di-ø.*

say-PAST-3SG

「AはBにCがリンゴを食べた／食べる／食べていると話した。」

b.	<i>A</i>	<i>B-ga</i>	<i>C</i>	<i>olama-ni</i>	<i>yey-ish-i-ni</i>	<i>ayt-di-ø.</i>
	NAME	NAME-DAT	NAME	apple-ACC	eat-VN-3SG.POSS-ACC	say-PAST-3SG

「AはBにCがリンゴを食べると話した。」

「発話」以外の上位節述語でも同様の現象が見られる。以下の例では、補文節における *-digan* が容認されないか容認度が下がり（例文中の？は容認度が低い

ことを表す)<sup>20</sup>、その代わりに動名詞を用いる。以下、「命題に対する姿勢」「評価」「知識と知識獲得」「恐れ」の順に例を挙げる。

## (21) 「命題に対する姿勢」

a.	<i>A</i>	<i>C</i>	<i>olma</i>	<i>ye{-gan/?-digan/-yotgan}-i-dan</i>
	NAME	NAME	apple	eat-PTCP.PAST/-PTCP.NPST/-PTCP.PROG-3SG.POSS-ABL

*gumonsira-moqda-ø.*

doubt-CONT-3SG

「AはCがリンゴを食べた／食べる／食べていることを疑っている。」

b.	<i>A</i>	<i>C</i>	<i>olma</i>	<i>yey-ish-i-dan</i>	<i>gumonsira-moqda-ø.</i>
	NAME	NAME	apple	eat-VN-3SG.POSS-ABL	doubt-CONT-3SG

「AはCがリンゴを食べることを疑っている。」

## (22) 「評価」

a.	<i>C</i>	<i>olama-ni</i>	<i>ye{-gan/*-digan/-yotgan}-i</i>	<i>rost.</i>
	NAME	apple-ACC	eat-PTCP.PAST/-PTCP.NPST/-PTCP.PROG-3SG.POSS	true

「Cがリンゴを食べた／食べる／食べているのは本当である。」

b.	<i>C</i>	<i>olama-ni</i>	<i>yey-ish-i</i>	<i>rost.</i>
	NAME	apple-ACC	eat-VN-3SG.POSS	true

「Cがリンゴを食べるのは本当である。」

(23) 「知識と知識獲得」

a.	<i>A</i>	<i>B-dan</i>	<i>C</i>	<i>olma</i>	<i>ye{-gan}/<sup>2</sup>-digan/-yotgan}-i-ni</i>
	NAME	NAME-ABL	NAME	apple	eat-PTCP.PAST/-PTCP.NPST/-PTCP.PROG-3SG.POSS-ACC

*eshit-di-o.*

listen-PAST-3SG

「AはBからCがリンゴを食べた／食べる／食べていると聞いた。」

b.	<i>A</i>	<i>B-dan</i>	<i>C</i>	<i>olma</i>	<i>yey-ish-i-ni</i>	<i>eshit-di-o.</i>
	NAME	NAME-ABL	NAME	apple	eat-VN-3SG.POSS-ACC	listen-PAST-3SG

「AはBからCがリンゴを食べると聞いた。」

(24) 「恐れ」

a.	<i>A</i>	<i>C</i>	<i>ayni/chiri-gan</i>	<i>olma-ni</i>
	NAME	NAME	rot-PTCP.PAST	apple-ACC

*ye{-gan}/<sup>2</sup>-digan/-yotgan}-i-dan*

eat-PTCP.PAST/-PTCP.NPST/-PTCP.PROG-3SG.POSS-ABL

*xavotirlan-di-o.*

worry-PAST-3SG

「AはCが腐ったリンゴを食べた／食べる／食べているのを心配した。」

b.	<i>A</i>	<i>C</i>	<i>ayni/chiri-gan</i>	<i>olma-ni</i>	<i>yey-ish-i-dan</i>	<i>xavotirlan-di-o.</i>
	NAME	NAME	rot-PTCP.PAST	apple-ACC	eat-VN-3SG.POSS-ABL	worry-PAST-3SG

「AはCが腐ったリンゴを食べるのを心配した。」

なお、「発話」「評価」「知識と知識獲得」の用例は、テキストデータからも抽出されている（「発話」の用例は(9)、(10)を参照されたい）。しかし、テキストでは、これらの場合 *-digan* が用いられる用例はない。

#### 4.2.2. 動名詞のみ用いられる例

前節と同様、表8を参照すると、補文節に動名詞のみが用いられる例は「願望」(25)、「操作」(26)、「モーダル」(27)の場合である。これらの場合、動名詞を形動詞に置き換えることはできない。

(25) 「願望」

<i>C</i>	<i>olma</i>	<i>yey-ish-i-ni</i>	<i>xohla-y-di.</i>
NAME	apple	eat-VN-3SG.POSS-ACC	hope-NPST-3SG

「Cはリンゴを食べたい。」

## (26) 「操作」

<i>A</i>	<i>C-ga</i>	<i>olama-ni</i>	<i>yey-ish-ni</i>	<i>ta'qiqla-di-ø.</i>
NAME	NAME-DAT	apple-ACC	eat-VN-3SG.POSS-ACC	forbid-NPST-3SG

「AはCにリンゴを食べることを禁止した。」

## (27) 「モーダル」

a. <i>C</i>	<i>olma</i>	<i>yey-ish-i</i>	<i>kerak.</i>
NAME	apple	eat-VN-3SG.POSS	necessary

「Cはリンゴを食べなければならない。／食べるべきだ。」

b. <i>C</i>	<i>bitta-da olma-ni</i>	<i>yey-ish-i</i>	<i>mumkin.</i>
NAME	one-LOC apple-ACC	eat-VN-3SG.POSS	possible

「Cは一口でリンゴを食べることができる（食べられる）。」

なお、テキスト調査でも、「モーダル」の用例が見られる (16)-(18)。

## 4.2.3. 形動詞のみ用いられる例

最後に、補文節に形動詞のみが用いられる例を参照する。この例は「直接知覚」(28)の場合である。この場合、動名詞に置き換えることができない。

## (28) 「直接知覚」

<i>A</i>	<i>C</i>	<i>olma-ni</i>	<i>ye-yotgan-i-ni</i>	<i>ko'r-di-ø.</i>
NAME	NAME	apple-ACC	eat-PTCP.PROG-3SG.POSS-ACC	see-PAST-3SG

「AはCがリンゴを食べているのを見た。」

補文節が *realis* であるなら形動詞も動名詞も用いられるはずである。しかし、(30) でなぜ動名詞が用いられないかという問いに関して、筆者は現段階で確実な答えを持ち合わせてはいない。これに関しては更なる検証が必要である。おそらく、*-yotgan* で表されるような事態は話者の眼前で行われており、*actual* の度合いが高いためであろう。そのため、動名詞を許さないのではないだろうか。

## 4.3. 小結

本節では、3節での分析（「形動詞節は *realis* のみ、動名詞節は *realis/irrealis* どちらも表すことができる」）が本節でも当てはまるかどうか、について検証する。

まず、分析結果を *realis/irrealis* という観点から整理・

考察する（*realis/irrealis* の説明は3.2節を参照されたい）。次頁の表9で、分析結果を *realis/irrealis* の観点から整理する。上位節述語の上部に動名詞と形動詞のどちらが使われるかを示し、下部には上位節述語が *realis/irrealis* のどちらに属するかを示してある。

つまり、形動詞は *realis* のみを表し、動名詞は *realis, irrealis* 両方とも表すといえる。ただし、これは形動詞のみが許される「直接知覚」には当てはまらない。

## 5. おわりに

本稿は、動名詞・形動詞節が上位節の必須項である場合について、テキストデータ及びエリシテーション

表9：形動詞・動名詞と *realis/irrealis* の関係

形動詞		動名詞		
「直接知覚」(28)	「発話」	(20)	「願望」	(25)
	「命題に対する姿勢」	(21)	「操作」	(26)
	「評価」	(22)	「モーダル」	(27)
	「知識と知識獲得」	(23)		
	「恐れ」	(24)		
4.2.3 節	4.2.1 節	4.2.2 節		
realis		irrealis		

調査を用いて、動名詞・形動詞節の相違について明らかにした。以下に本稿で行った二つの調査の結果・分析を要約する。

テキスト調査 (§3) :

形動詞・動名詞節が上位節の目的語・主語として用いられる場合、次の結論を得た:形動詞節は *realis* のみ、動名詞節は *realis/irrealis* どちらも表すことができる。

エリシテーション調査 (§4) :

「直接知覚」以外の上位節述語では、上記の結論を裏付ける結果となった。これは「直接知覚」における補文節は、*actual* の度合いが高いためであろう。

つまり、動名詞・形動詞節が補文節として用いられる場合においては、「形動詞節は *realis* のみ、動名詞節は *realis/irrealis* どちらも表すことができる」と言える。ただし、「直接知覚」を表す上位節述語の場合は、形動詞しか用いられない。

## 6. 今後の課題

この研究以降は、補文節のみならず、形動詞節・動名詞節自体に格接辞及び接語がつく場合、後置詞が続く場合、連体修飾する場合について、それぞれ検証する。これらの総合的な検証を通して、形動詞節と動名詞節の差異を明らかにすることが今後の課題である。

### 略語一覧

-		接辞境界	NAME	proper noun	固有名詞
=		接語境界	NEG	negative	否定
+		複合語境界	NPST	non-past	非過去
1, 2, 3		1, 2, 3 人称	PAST	past	過去
ABL	ablative	奪格	PASS	passive	受身
ACC	accusative	対格	PL	plural	複数
ADJLZ	adjectivalizer	形容詞化	POSS	possessive	所有
CONT	continuous	継続	PRF	perfective	完了
CVB	converb	副動詞	PROG	progressive	進行
DAT	dative	与格	PTCP	participle	形動詞
GEN	genitive	属格	REFL	reflexive	再帰
LOC	locative	位置格	SG	singular	単数
			VN	verbal noun	動名詞

## 参考文献

- Abdurahmonov, G. A. va Sh. Sh. Shoabdurahmonov, A. P. Hojiyev (1975) *O'zbek tili grammatikasi I tom Morfologiya*. [ウズベク語文法 第1巻 形態論] Toshkent: O'zbekiston SSR 《Fan》 nashriyoti.
- Bodrogligeti, András J. E. (2003) *An academic grammar of Modern Literary Uzbek*. München: Lincom Europa.
- Cristofaro, Sonia (2003) *Subordination*. Oxford: Oxford University Press.
- Csató, Éva Á. (1999) Non-finite verbal constructions in Turkish. Bernt Brendemoen (ed.) *Altaica Osloensia. Proceedings of the 32. Meeting of the Permanent International Altaistic Conference, Oslo, June 12-16, 1989*. 75-88. Oslo: Universitetsforlaget.
- \_\_\_\_\_ (2010) Two types of complement clauses in Turkish. Julian Rentsch (ed.) *Turcology in Mainz / Turkologie in Mainz. [Turcologica 82.]*. 107-122. Wiesbaden: Harrassowitz.
- Dixon, R. M. W. (2010) *Basic Linguistic Theory. Volume 2 Grammatical topics*. Oxford: Oxford University Press.
- Kononov, A. N. (1960) *Grammatika sovremennogo Uzbekskogo literaturnogo iazyka*. [現代標準ウズベク語文法] Moskva, Leningrad: Izdatel'stvo akademii nauk SSSR.
- Noonan, Michael (1985) Complementation. Shopen, Timothy (ed.) *Language Typology and Syntactic Description: Complex constructions. Volume II*. 42-140. Cambridge: Cambridge University Press.
- \_\_\_\_\_ (2007) Complementation. Shopen, Timothy (ed.) *Language Typology and Syntactic Description Second edition. Volume II: Complex Constructions*. 52-150. Cambridge: Cambridge University Press.
- Reshetov, V. V. va S. I. Ibrohimov, U. T. Tursunov, F. K. Kamolov (1966) *Hozirgi O'zbek Adabiy tili I Fonetika, Leksikologiya, Morfologiya*. [現代ウズベク標準語 I 音韻論、語彙論、形態論] Toshkent: O'zbekiston SSR 《Fan》 nashriyoti.
- Sjoberg, F. Andrée. (1963) *Uzbek Structural Grammar*. Uralic and Altaic Series, Vol.18 Indiana University, Bloomington.

## 調査資料

- Beknazarov, O'roz va Ismoil Yuldashev (2007) *Besh qiz va Bir yigit*. Toshkent: Cho'lpon nomidagi nashriyot-matbaa ijodiy uyi.

## 註

- 2007年にNoonan(1985)が所収されている論集の第二版が出版された(書誌情報に関しては、参考文献一覧を参照されたい)。
- Noonan(1985, 2007)自体も、他の研究(Cristofaro 2003: 95-154, Dixon 2010: 376-421)も、先の定義に当てはまる補文節のみならず、意味的に補文節の内容を表す言語の例を多く挙げている。以下のLangoの例は、並置補文(paratactic complement)を用いて、意味的に補文節の内容を表している。

Lango (Noonan 2007: 65)

Dákô	òkòbbi	icó	òkwòrò	kál
woman	told.3SG:DAT	man	sifted.3SG	millet

'The woman said it to the man, he sifted millet'  
(The woman told the man to sift millet (and he did))

ウズベク語では、補文節に相当する内容を、補文節で表すことも、補文節以外の手段で表すこともある。しかし、紙幅の都合上それらすべてを取り扱うことはできない。そのため、本稿では補文節のみに焦点を当てる。

- Sjoberg (1963: 83) は、*-lari* は *-(s)i* よりも使われないこと、さらに *kitab* 「本」に *-lari* が付いた形式 *kitoblari* に二つの解釈が生まれることを指摘している。例: *kitop-lari* 「彼/彼女たちの本(複数)」、*kitop-lar-i* 「彼/彼女の本(複数)」
- Bodrogligeti (2003: 617, 624) では、それぞれ(5)は「形容詞」として、(6)は「動名詞(action noun)」として、用例が挙げられている。



- 5 筆者の管見の限りでは、*-(a)r* 形動詞が項を保持せず連体修飾する例や、一語彙素となっている例がある。項なし連体修飾：*oq-ar suv* [flow-PTCP.FUT water]「流れる水」(Abdurahmonov va Shoabdurahmonov, Hojiev 1975: 514)、一語彙素：*husn-buz-ar* [beauty-break-PTCP.FUT]「吹き出物 (lit. 美を壊すもの)」(Abdurahmonov va Shoabdurahmonov, Hojiev (1975: 514) でも、連体修飾する際に *-(a)r* は非過去形動詞 *-digan* と置き換えることができず、動詞というより形容詞に近い性質を持っていると指摘している。これは *-(a)r* が項を保持することができないという点からの指摘であると考えられる。*-(u)vchi* は連体修飾に生産的に用いられるものの、節名詞化はできず専ら名詞を派生する。例：*yoz-uvchi*「作家」(*yoz-*「書く」)
- 6 形動詞が相対テンスも表わすのであれば、このグロスの振り方は不適當であるかもしれない。しかし、他に良い代替案が見つからないため、本稿では先行研究の記述に従ったグロスを振ることにする。
- 7 Abdurahmonov va Shoabdurahmonov, Hojiev (1975) は「動名詞」の項で *-maslik* を取り扱っていない。一方、Bodrogligeti (2003: 575) では、*-maslik* は *-moq*, *-(i)sh* の否定形である、としている。
- 8 これには二つの理由がある：1. 項を持たない、2. 意味が特殊化する例がある (ex. *bil-ish*「知識」)。
- 9 Bodrogligeti (2003: 212) は、*-moq* を不定詞 (infinitive) として挙げている。おそらくこれが「第一不定詞」であろう。
- 10 ウズベク語と同じチュルク諸語に属するトルコ語では、すでに補文節に関する研究が行われている。Csató(2010)は、非定型動詞の中でも補文節を成す二つの要素 (形動詞 (participle) DIK と不定詞 (infinitive) MA) の差異を、Csató(1990)の調査結果も用いながら、考察している。なお、Csató(1990)は、本稿4節のエリシテーション調査のように、Noonan(1985)に挙げられた上位節述語のリストを用いて、*dik* と *ma* のどちらが現れうるかを調査している。
- 11 いずれも2014年1月から8月、2015年7月に掲載された記事を用いている。単語数2,905、文字数21,037。
- 12 全48ページ。単語数約42,000、文字数約44,800 (一ページあたり、単語数1,500・文字数1,600で計算している)。
- 13 以下、用例末に典拠情報を次のように付す：ニュース記事の場合 (記事が出た日月年：テキストファイル内行数)、小説の場合 (BeshQiz\_va\_BirYigit.txt: テキストファイル内行数)
- 14 *aka* は「兄」という意味の他、(12)のように、名前後に *aka* を続けることで目上の男性に対しての敬称として用いる場合もある。
- 15 表5に示したように、Bodrogligeti (2003: 622-623) では、現在形動詞 *-yotgan* が actual な動作を表すという記述がある。
- 16 ここで言う補文 (complement) とは、注2で示したような、補文節ではないが意味的に補文節の内容を表すものを指すのだろう。
- 17 この場合、節主語が許容されなさそうだが、実際には節主語の例が存在する。以下に例を示す。
- ... [kollektor-lar-ni      tozala-sh va      yer-lar-ning      sho'r-i-ni      yuv-ish]<sub>s</sub> hosil-ning  
water.collecting-PL-ACC    clean-VN    and    ground-PL-GEN    salty-3SG.POSS-ACC    wash-VN    product-GEN
- garov-i      ekanlig-i-ni      atrofticha      tushuntir-ib      ber-di-ø.  
deposit-3SG.POSS    COP.NMLZ-3SG.POSS-ACC    fully    understand-CVB    give-PAST-3SG
- 「…集水溝を綺麗にすることと土地の塩を洗うことが、収穫の担保であることを十分に理解させてくれた。」  
(BeshQiz\_va\_BirYigit.txt: 419)
- 18 ウズベキスタンの現地通貨の名称。
- 19 タシケント市出身、20代、女性。日本への留学経験もあり、日本語を流暢に話す。
- 20 動名詞・形動詞の違いとは関係なく、容認されなかったあるいは容認度が下がる例が見られた。例えば「AはCがリングを食べていると信じている」の場合、上位節述語 *ishon-yap-ti/ishon-a-di* [believe-PROG-3SG/believe-NPST-3SG]「信じている／信じる」が相応しくないという指摘を得た。

